

【個人研究】

スウェーデン、ウプサラ市における社会統合に向けた取り組み —市役所、SFI、公立学校への聞き取り調査より—

森 恭子*

Approach to Social Integration in Uppsala, Sweden: Interviews at city hall, SFI, and a public school

Kyoko MORI

Due to the recent large influx of Syrian refugees, the City of Uppsala is dealing with many new migrants. The City of Uppsala is within commuting range of Stockholm, and large-scale development has been promoted as the population increases. This article describes some of the City of Uppsala's efforts at settlement support and social integration policies for migrants. Based on interviews with relevant persons conducted in March 2019, this article describes the current situation of and issues with training programs for social integration at Uppsala City Hall (Kommun), a Swedish language school for adult immigrants (SFI) run by city hall, and Swedish language support at a public school. The City of Uppsala has been taking the initiative in integrating immigrants into the local community and is actively working to improve the quality of administrative services by promoting the efficient use of human resources for migrants.

Key words : settlement services, social integration, multicultural society, regional cohesive society, refugees, migrants, foreigners
定住支援、社会統合、多文化共生、地域共生社会、難民、移民、外国人

はじめに

EU諸国は大量の難民流入により、国内の難民問題への対応に苦慮しているが、スウェーデンも例外ではない。シリア内戦が激化する中で、2015年にスウェーデンにも難民が押し寄せ、ストックホルム近郊のウプサラ・コミュニティ(市：以下、ウプサラ市とする)も多くの新規移住者への対応に直面することになった。

本稿は、スウェーデンのウプサラ市の移住者への定住支援・社会統合施策について、関係者・当事者からの聞き取り調査(2019年3月実施)を踏

まえ、市内の取り組みの一端を報告する。聞き取り調査の対象は以下である。

- ①市役所職員のための「より効率の良い受け入れ」研修プロジェクト
 - ②市の運営する成人移民向けスウェーデン語学校(SFI: svenska för invandrare)
 - ③公立学校の移民生徒へのスウェーデン語学習支援
 - ④公立図書館の統合化に関する地域サービス
 - ⑤学習促進協会(Studieförbundet)ウプサラ支部(非営利団体)のエスニックグループへの支援
- 本稿では紙面の関係もあり、①、②、③を中心に紹介し、ウプサラ市の社会統合の取り組みの一部を報告する。

* もり きょうこ 文教大学人間科学部人間科学科

なお、本調査は日本学術振興会科学研究費助成事業（平成29年度基盤研究「移民・難民の統合プロセスにおけるソーシャルワークに関する研究」）の一環であり、調査に関しては、文教大学人間科学部人間科学研究科研究倫理審査委員会の承認を受けている（平成29年10月）。あらかじめ関係者に調査に関する説明文書やインタビューガイドなどをメールで送り、現地の通訳・コーディネーターを通して調査協力の同意を得た。

1. ウプサラ市の概要

スウェーデンの2018年の統計¹⁾によれば、人口の9.1%は外国籍の人々であり、24.9%は外国に背景をもつ人々で構成されている²⁾。もはや移民国家といえなくもないスウェーデンであるが、難民の受入れも寛大であり、2016年の難民等³⁾の受入れは約7万人にのぼり、2018年でもその数は約2万5千人に及んでいる⁴⁾。

ウプサラ市は、スウェーデンの首都ストックホルムから約70km、電車でわずか40分程度の場所に位置している。スウェーデンの人口は約1000万人であるが、ウプサラ市は約15万人、国内では第4位の大都市である。ウプサラ市の外国籍住民は約1万5000人、外国出身の住民も約4万5000人を占めている⁵⁾。イラン、フィンランド、イラク、シリア、ドイツ、中国、レバノン、ポーランド、エチオピアの言語グループが多く、ウプサラ市の学校では、51言語で対応できる教師がいるそうである。北欧最古のウプサラ大学があり、大学を中心として歴史や文化の香り豊かな街として知られている。ストックホルムへの通勤圏となっており、2016年には前年比2.3%で住民が増加し、国内でも最も人口増加が著しい地域といわれている⁶⁾。そのため、最近では大規模開発がすすめられ、働き手が不足している状況にある。

2. ウプサラ市役所の社会統合に関する職員研修

ウプサラ市は2015年の難民の流入により、難民への対応について職員および部署間の協力体制が問われることになったという。そこで、今

後の難民へのサービスの向上を目指し、職員の難民の理解や対応および職員・部署内の連携協働を図っていくために「より効率のよい受入れ」(Efectivare mottagande)」プロジェクトが開始された⁷⁾。市役所内の4つの部署(人材、労働市場、社会福祉、文化)から構成されるプロジェクトチームが発足され、プロジェクトリーダーには事業開発課の職員、副リーダーには労働市場課の職員が採用されたが、今回はその二人からプロジェクトの話伺った。

(1) 「より効率の良い受入れ」プロジェクトの概要

「より効率のよい受入れ」プロジェクトは、難民の受入れプロセスの時間を短縮し、難民が教育または仕事などで早く自立することを目的としていた。

プロジェクトチームのメンバーたちは、まず社会統合に関する勉強会を重ね、それに関わる専門家の話を聞いたり、入国管理局、社会保険庁、子どものオンブズマン機関や差別反対組織などを見学するなどして見識を深めていったそうである。メンバーが、実質的には職員研修の講師やファシリテーター役となるので、表現、説明、議論の仕方などの教育方法を身につけるために、レトリック(修辞学)の専門家からも指導を受けたという。半年後、これらの学びを経て、メンバーたちが市の職員向けの研修プログラムを開発した。

職員研修プログラムは、4種類のテーマー①受入れ姿勢とコミュニケーション、②多文化に対応する能力(intercultural competence)、③入国と定着プロセス、④難民の健康で構成された。1つのテーマで、1日かかるが、実際は半日×2回の2日間で実施する。どのテーマも「講義」、「グループディスカッション」、「演習(practice)」を取り入れて、職員が効率よく学べるように配慮したという。本プロジェクトは、2年間、2018・2019年度で実施され、参加対象人数は市の職員約340名で、1つのセッションで毎回25～30名の参加者で行われた。

(2) 研修プログラムの内容

以下、4つの研修プログラムの内容について紹

介したい。

①受入れ姿勢とコミュニケーション

ここでは「差別」や「偏見」について学ぶことを重視するという。差別禁止法が制定されているスウェーデンでは、差別や偏見を学ぶ教材があるので、研修ではそれらを活用しディスカッションをする。その際、ウプサラ市の事業計画の中に、LGBTの視点も取り入れられているため、LGBTへの差別についても同時に学ぶ。またコミュニケーションについては、通訳の活用方法、よりシンプルな表現で相手に話すこと、難しい対応（相手が怒る、泣く等の感情をぶつけるなど）を迫られたときの行政職員としてのプロフェッショナルな対応の仕方などを、ロールプレイを通じて学ぶ。また参加者自身が防音器具をつけて、わざと相手とコミュニケーションができてにくい場面をつくり、言葉が理解できない難民の大変な気持ちを疑似体験することなども実施されたという。

②多文化に対応する能力

難民およびスウェーデンの双方の文化について理解し、文化的差異の中でどのように相手に対応するのかを学ぶ。たとえば、中東や北アフリカからの出身の難民女性は、働かないで自宅で子育てすることが一般的であるが、一方、スウェーデンの女性は社会進出し共働きが普通であることなどがある。また、価値観についての議論では、たとえば一般社会は男女関係を基本にしているので、同性愛者に出会ったときに、どのように対応すればよいのかについて、①の研修テーマの姿勢とも関連付けて議論する。こうした文化の話し合いの中で、参加者自身の文化や価値観への新たな気づきがあるという。

③入国と定着プロセス

法制度、他の行政機関の仕事内容および福祉関係全般の知識も学ぶという、かなり知識を詰め込むハードなコースであるようだ。難民が入国し定住していくプロセスの中で、どのような機関がいつ何をやるかについて学んでいくが、そもそも複雑すぎてマニュアルはないようである。一人の難民のプロセスに関わるすべての行政機関についての役割を説明するらしいが、子ども、高齢者、病気のある人など、それぞれの背景が異なるため、

プロセスも当然異なる。また、赤十字社が実施している難民の理解を深めるためのプログラムをアレンジした演習を行っている。これは、難民となつてから母国を離れ他国に到着するまでのシナリオに基づく難民のプロセスを疑似体験する演習になっている。この際、スウェーデンが内戦などになったことを仮定し、逃げる際に何を持参するか参加者に選ばせるが、選んだ物によっては、目的地にまでたどり着けないなど過酷な試練が待っているゲームである⁸⁾。終了後に、参加者の感情や将来についての気持ちなどを話し合うが、この演習は研修の中でも参加者の評価がひととき高く、難民の理解につながっているようである。

④難民の健康

ここでは戦争体験によるトラウマやPTSD、難民の中でよくみられる病気についての知識を学んだり、文化による医療に関する考え方や受診・受療の違い（たとえば精神科への受診への抵抗など）を理解する。また、スウェーデンでの医療制度について、スウェーデンでは個人がかなり責任をもたなければならないことと同時に、難民が医療を受ける権利についても説明する。滞在許可を得た難民は、スウェーデン人と同等の権利をもつが、難民申請中の人や、隠れてホームレスになっている人々についても、一定の基本的な権利があり、子どもの場合はかなりの権利を有していることを説明するという。さらに、スウェーデン社会の中では、難民の人たちの多くが伝染病やHIV感染者であるという偏見があるそうだが、実際、統計によればそうした事実がないことも説明するそうだ。

(3) プロジェクトの評価

各テーマの研修終了後に、参加者にメールでアンケートを実施し、1～4点までの評価をつけてもらうそうだが、今のところ平均すると3であり、主催者側としては満足している様子であった⁹⁾。本プロジェクトの成果として、グループディスカッションを通して、異なる部署や職種の人たちが交流でき、横のつながりができたこと、そして統合プロセスの中で、それぞれの役割が理解でき、それを共有しているという意識がもてたことがあげられた。ウプサラ県内の他のコミュニオンも

本プロジェクトに注目しており、これについてのフォーラムを県内で開催予定ということであった。

プロジェクト終了後の課題として、一つは多くの職員の受講が望まれるということであった。実際ウプサラ市の職員は総勢約1万2000人ということであるが、今回の受講生はそのうちの約3%に過ぎない。二つ目の課題は、本研修の受講後に受入れプロセスが効率よく進められたかどうかを具体的にどのように測定するのか、そして三つ目は、今回の研修の教材の管理や今後の法制度等の変化のアップデートについて、誰が、あるいはどこの部署が引き続き責任をもって管理していくのか等の課題があるようだ。これらの件について、ウプサラ市の上層部と話し合いをすすめているということであった。

2.成人移民向けスウェーデン語学校 (SFI : venska för invandrare)

(1) ウプサラ市のSFIについて

スウェーデンには、国の方針として移民・難民向けにスウェーデン語教育を無料で提供するSFI機関が各コミュニティ(市町村)に設置されている。SFIの運営主体は、コミュニティ、国民高等学校、民間企業、民間非営利団体であるが、ウプサラ市の場合は、現在は、国民高等学校1校、民間団体2校に委託しており、残りは市が運営している。受講要件として、ウプサラ市に住居登録し、個人番号があり、20歳以上または高等学校の卒業証書または同等の資格を持つ者が対象となる¹⁰⁾。民間委託にするかどうかは各コミュニティの方針による。ウプサラ市ではどちらかといえば市がSFIを主導しているようであった。

SFIの民間委託をめぐる議論として、かつては民間委託の競争原理に関する賛否があったらしいが、現在は、目的にあった教育が良いとされ、利益優先によって質が下がらないことが重要であるようだ。また、民間委託であれば、その業務内容を点検するという作業が必要になってくるので必ずしもコスト節約になるともいえないということであった。

本調査では、ウプサラ市のSFIの本部の受付窓

口(receptionist)を担当してる3名から主に話を聞いた。ウプサラ市の新規移民でSFIを受ける場合は、まず受付窓口で新規移民の語学のレベルが測定され、各クラスに振り分けられる。語学のレベルは、3段階に評価され、1は、読み書きができずローマ字もできない人、2はローマ字は読めるが、一定の教育を受けた人、3は大学卒や語学勉強の経験がある人などで、それぞれ3つの学習ルートで学習していくそうである。

語学に加え、スウェーデン社会で生活するためのオリエンテーションが母語で行われている(主に難民対象)。国の基準では60時間、8つのテーマ(①到着、②生活、③自己支援と開発、④個人の権利と義務、⑤家族をはじめ、子どもと暮らす、⑥影響を与えるもの、⑦健康管理、⑧年齢を重ねること)で授業が行われるが、ウプサラ市は20時間追加し、また一つテーマ「難民の健康」を追加している。難民の健康問題が深刻という理由であるそうだが、その内容は、身体的・精神的な問題、エクソサイズ、ヘルスケアシステム、プライマリケアなどである。

すでに職業上専門的な資格のある人たちについては、その他に専門的内容のスウェーデン語コースもある。それほどコースの数は多くないようだが、ウプサラ市には医療領域のコースがあるようだ。また、労働市場にあわせて、労働力不足の領域での特定分野のスウェーデン語と職業訓練を合わせたコースもあり、最近では、ドライバーになるためのコースが創設されたという。

近年は、単純労働や肉体労働などの仕事が減ってきており、就職するためには語学能力が必要になってきている。清掃会社でも安全面のルールを理解しなければならないため、スウェーデン語の能力が必要であるという。

SFIは教育制度の一環であり、教育目標が設定され、受講者たちの成績を付ける。成績を付けるSFIの教員は教員免許の保持者でなければならない。スウェーデン語の特価した語学教育の免許というものはないらしい。高校レベルまでのスウェーデン語が身に付くということである。

(2) 迅速な受入れ・アセスメントおよびサポートチームの設置

ウプサラ市では、本部で受付窓口が設置されていることが特徴であり、これがうまく機能しているようだ。新規移民は、最初にこの受付窓口で語学レベルの判断および将来に向けての相談がなされ、SFIの学校のクラスに配属される。一般的には新規移民は、直接、学校に行き、そこでレベルの割り振りが決められるようだが、ウプサラ市ではまず本部の受付窓口に行く。そこで、その人に適した各学校のクラスに振り分けるほうが、効率が良いということのようである。たとえば、他の小規模なコミュニティの場合、コースが始まってから次のコースが始まるまで何ヶ月もかかり待ち時間が長くなるらしい。ウプサラ市の場合長い場合でも45日間待ち時間であるが、それでも待ち時間は短いほうであるという。ウプサラ市は、学校を完全に閉めている期間がないので、勉強したいときはいつでもできるようである。新規移民ですぐにでも勉強したい人がいれば、待ち時間が長くなるほどモチベーションが下がってしまうので、待ち時間を短くすることをこころがけているようだ。

受付窓口担当者らの背景は、SFI、小学校、成人教育の教師の経歴をもつ教育のスペシャリストである。彼らはこの仕事にやりがいを感じている様子であった。世界中から来た人々（1年間に4000人くらいらしい）に対応するため、多様な人々と会うことが興味深いということであった。

受付窓口とともにサポートチーム（6名）を設定しており、特別なニーズがある場合の相談を受けているようだ。学習コーチ（たとえば勉強の仕方がわからない人への支援）、心理的支援、社会面での支援の担当者が配置されている。サポートチームができた背景には、ドロップアウトを防ぐことがあるようだ。勉強を重ねても、進捗状況は個人差がある。語学を学ぶ意欲（モチベーション）が低かったり、進歩がなかなか見られない人などがいて、途中でドロップアウトしてしまう場合があり、卒業できない人たちもいる。そのような人々を未然に防ぐためにサポートチームが2年前に設定されたらしい。日本でSFIのようなシステ

ムを作る場合には、サポートについても同時に考える必要があることを助言された。

(3) 移民は社会的負担なのか一人材の有効活用に向けて

生活保護を受給するための要件として、SFIの受講が必須であるかどうかの筆者の質問に対しては、実際そうであるという返答であった。しかし生活保護担当者への批判的な意見が聞かれた。生活保護の担当者は、職業的・経済的な自立を優先するので、スウェーデン語が不自由であっても早く就職させることを重視し、労働条件の悪い仕事であっても就職させる傾向があるようだ。そのため、就職しても長続きせず辞職することになり、再度、SFIの受講へと逆戻りになるようだ。彼らとしては、スウェーデン語を十分に学んだ後に、より良い仕事に就職したほうが効率が良いと考えていた。もちろん、本人が語学の勉強への意欲がなく、早く就労したいと望む場合もあるが、そのような場合は生活保護の担当から、語学の勉強するように指導があるという。

移民や難民はしばしば受入れ社会の社会的負担として捉えられる傾向にあるが、難民の中には医者やエンジニアなど高学歴・専門職の人も少なくない。したがって、スウェーデン社会はそれらの人材を育成するための費用をかけることなく、優秀な移民人材を確保できているので、彼らを活用しないほうが無駄であることが話された。とはいえ、高学歴・専門職の人々には言語の壁等があり、それ相応の職業に就職することは困難ではないかという質問を試みた。受付窓口担当者らがいるには、確かにそのような人々は英語が話せるため最初はスウェーデン語を学習しようとしませんが、就職活動をする中でスウェーデン語が必要であることに気が付くらしい。本部のSFIの他の部署では就職相談をしているが、本人の明確な目標があれば、本人の希望の道は開けるといって、ポジティブな答えがかえってきた。

(4) ウプサラ市SFIの課題

SFIの課題として、一般的な学校と比較しての困難さが語られた。例えば、一般の学校では、入

学する時期やクラスも最初から固定である。しかし、SFIでは、新規移民に入国後にすぐに語学の勉強を開始させるために、4週間に1回、新しい生徒を受け入れる。新規移民の受入れ時期はさまざま、クラスも常に流動的であるのでクラスはカオス状態、それがクラス運営の難しさでもある。しかし、それがグループダイナミックでもあり、チャレンジでもあるという面白さでもあるようだった。

また、生徒の一人ひとりがさまざまな状況の中にある。子どもができた、就職したなどライフステージも異なり、また勉強の習熟度の速さも異なる。教員にも、それぞれ個別に対応する柔軟性(フレキシビリティ)が求められる。

SFIのコースについても工夫をしているようで、ある地区では、学歴が低い人たちをまとめて社会オリエンテーションと語学の授業を行いパッケージ化して、同じ教員が集中して8時～15時まで教えたり、幼稚園に2歳以下の子どものいる母親を対象とした特別クラスを設置し子どもを連れて学習する機会も設けられているという。

3. 公立学校での生徒への語学支援

(1) 学校の概要

ウプサラ市駅からバスで30分程の郊外にある公立学校を訪問し、学校長、副校長および移住した生徒たち(3名)から学校におけるスウェーデン語学支援について話を聞いた。この地域は多様性のある地域であるという。新旧の住民、都会と地方出身者および富裕層と貧困層が混在し、約半数はスウェーデン出身者ではなく、社会的経済的に弱い地域としてみられているそうである。6歳から15歳まで、生徒は約400人、職員は55名いるそうだ。昨年からは6歳児教育が義務化され、スウェーデン語が十分でない子どもたちも受け入れている。教員はスウェーデン語以外に他の言語ができ、多様な生徒たちと向き合うことに意欲のある教員を積極的に採用しているということである。学校は市民が利用できる図書館や余暇施設と併設されている。

(2) 移民生徒たちへのスウェーデン語教育について

新規移民の7年生から9年生の生徒(いわゆる中学生)を対象としたスウェーデン語の語学学習のための特別な「準備クラス」が設置されている。それ以外の年齢の低い生徒は、最初から通常クラスに入れて学習させる。年齢が若い場合は語学の習得が早く、他の生徒と遊びながら学んだほうが良いということだった。準備クラスの学習期間は個人差はあるが、少なくとも2年以内で終了だそうである。学校での目標は、生徒たちが高校のレベルに達することができるようにすることである。9年生の時点で入学してきた生徒の場合は、高校進学までの時間が短いため、高校に進学した後も継続的に語学のサポートが受けられるようになってきているようだ。高校は20歳までなので、それ以降、語学教育が必要な場合は、成人教育(SFI)に移行する。音楽や美術など語学がそれほど必要とされない教科については、最初から普通クラスに入って学習させるということである。

新規移民の子どもの場合、まずウプサラ市の窓口で、子どもの語学の程度や学習背景など調べられ、準備クラスに入れるかどうか決定される。準備クラスに入る場合は、学校では必ず保護者と子どもとミーティングをもち、再度、学校で子どもの学習背景についてアセスメントする。その際、通訳を必ずつけて(学校が通訳料を負担する場合もある)話し合う。このミーティングが非常に重要であり、適格なアセスメントをして、どの学年に配置させるか決め、子どもがより良く学校生活を開始できるように心がけているということであった。学校に入学するまで長い場合は6カ月かかるので、早く学校に入れることが肝要であることも話された。

(3) 学校における社会統合の課題

学校の役割は勉強を教えることでもあるが、それと同様に、生徒たちが社会的にもより良い状況にあることが重要であると話された。子どもが良い状態であると勉強にも身が入り、また勉強ができることが子どもを良い状態に導くという相乗効果があるので、社会的環境と教育は密接に関係していることが強調された。

学校における社会統合 (integration) について配慮していることは、多様性のある生徒たちの交流を活発にすることだそう。同質の背景をもつ生徒たちでグループ化される傾向にあるため、クラスの構成員については意識的に異なるグループが交流できるように配置しているようである。また、学校には余暇施設が併設されているために、そこでさまざまなアクティビティで異なる背景をもつ人々と交流することになることも大きなことであることが話された。

他方、保護者との関係においては、ときには文化的衝突が起こる場合もあることである。例えば、とくに水泳の授業や生物学(の一部の性教育)などは、保護者から反発があり授業を受けさせないような要求がある。しかし、スウェーデンでは、水泳や性教育も義務教育の一環であるので、授業を受けなければ成績の評価を与えることができないことを保護者に通訳付きで説明し、納得いくまで根気よく対話を重ねて理解を促すようである。ある例では、女子生徒の語学をサポートする教員が男性教員であり、保護者も女子生徒も男性教員を変えるよう要求があった。しかし、男性教員を女性教員に変えるのではなく、女子生徒と男性教員が二人きりで学習しないように、人が往来するような、多くの人の目に触れる場所で学習するという取り決めをし、それを文書で合意してもらい対応したケースもあるという。異なる文化の違いもお互いに理解しつつ、対話による妥協点を大切にしているようであった。

(4) 準備クラスの生徒たちの語り

校長先生の配慮により、準備クラスの生徒3名から話を聞くことができた。女子2名、男子1名、出身地域はアフリカ、ヨーロッパ、中東で、難民の子どもも含まれていた。それぞれ11～13歳の間にスウェーデンに来て1年ほど準備クラスで学んできたという。準備クラスでは準備クラスで勉強をしながら、習熟度に応じて、普通クラスとの併用に切り替えられていくそう。スウェーデンに来る前に、英語が話せたり英語でのローマ字表記が理解できていた生徒の場合は2カ月で、そうでない生徒は6か月後に普通クラスに参加した。

3人とも、スウェーデン語でのコミュニケーションは全く問題がなく、読み書きも十分できていると話した。筆者が今回の調査で頼んだ通訳者によれば、インタビューを受けた生徒たちはきれいなスウェーデン語を話すと言っていたので、1年間で十分な学習成果が見込まれたのではないかと推察する。さぞかしバルタ教育なのかと思いきや、準備クラスは、9時～14時までで、宿題はほとんどないようである。ゲームをしたり、テレビを見たりグループワークをしたりなど楽しく学んだということであった。

準備クラスでは、校長先生の話ではスウェーデン社会の仕組みを教えることを重視しているということであったため、生徒たちにそれについて尋ねてみた。学んだ中では「民主主義、投票すること、いろいろな宗教や地理、からだの仕組み」などが役に立ったと話していた。

スウェーデン人生徒との関係についての質問に対しては、歓迎してくれる人や距離をおく生徒がいたり、スウェーデン語ができないことでいじめられたが、いじめたほうは自覚していないことなどが語られた。筆者が日本でもいじめがあり不登校になる子どもがいることを話したら、周囲の生徒が、語学を教えてあげたり、いじめがあったときはすぐに先生に相談することが良いとか、不登校になったら他の友達と連絡してあげたらよいなどの意見が出された。

社会統合に関わる質問(スウェーデン社会に受け入れられている感覚はあるかどうか、スウェーデン社会の一員だと思うか)を彼らに投げかけてみた。女子生徒二人は「ここに住み、この気候や生活様式に慣れてきた」、「話し相手がたくさんいる。1年半住んでいるが、もっと長く住んでいるような気がする」という肯定的な意見であった。一方男子生徒は、スウェーデンに生涯住むかどうかはわからず、母国に帰るかまたは他の国に行くかもしれないと語った。彼は難民の背景をもっているため複雑な心境かもしれないが、他の国に避難した彼の知人と比較すると、スウェーデンが平和で戦争がないこと、混雑していないことについて彼は満足しているということであった。

学校以外の過ごし方については、放課後に学校

の入り口にある施設のアクティビティ(サッカー、卓球、ビリヤード、ゲーム、お菓子作り、映画鑑賞など)に参加したり、水泳に行ったり、友人とテレビゲームをしたりなど、楽しく過ごしているようであった。また、将来については、車の仕事をしたい、ITコンピューターの仕事、まだ決めていないなど、一般の中学生のように、将来についての夢や希望などが、悲壮感なく語られた。

おわりに一小括

それぞれの調査先でみられた共通認識は、新規移民・難民を積極的に受け入れていくということが前提になっていたことであった。筆者がもっとも疑問に感じたことは、たとえばウプサラ市の職員研修が充実し、新規移民・難民への行政サービスが向上すれば、ウプサラ市に彼らが集住し、それによって一般の地域住民から反感を買うのではないかということであった。最近の国際情勢をみても地域住民の移民に対する嫌悪感や受け入れ拒否等が顕著になってきている。この点について職員研修のプロジェクトリーダーに質問したところ、リーダー曰く、今やウプサラ市はストックホルム近郊で仕事も豊富で、人気の街になっているから、人が集まることも当然になってきている、そのため、新規移民・難民の増加を懸念するよりも、むしろ彼らを受け入れ、いかに効率よく統合させるかに力を注いだほうが、後に想起される問題も少なくなるという回答であった。もはや受け入れは避けられないから、そうならばウプサラ市の最善の利益のために「人(移民)を活かす」対策をとるほうが、ある意味、賢明で合理的な戦法なのかもしれない、と筆者は納得せざるを得なかった。

今回の調査全体を通してみえてきたキーコンセプトの一つは、「効率化」であるといえる。市役所職員対象の研修では、職員が移民・難民の理解を深め、適切に彼らに対応し、市の他の部署と連携協働することで、統合への効率化を図ることが意図されていた。受入れ・定着プロセスを効率化することによって、のちに想定される問題を未然に予防できるという認識がみられた。SFIでは、本部で受入れ窓口を設置し、そこで新規移民の語学レ

ベルのアクセスメントをすることにより、いち早く、適切な学校のクラスに振り分けることができるメリットがあることや、語学を十分に学び、条件の良い仕事に就いたほうが効率が良いことが強調された。また学校では最初に保護者と生徒と母語によるミーティングを行い、学校入学に至るまでの間をできるだけ短期間で、生徒を準備コースに配置することの重要性が指摘された。

もう一つのキーコンセプトは「民主的な社会参加」である。職員研修では、職員が、差別に関する法律を学ぶ、難民申請者でも医療を受ける一定の権利があることが内容として盛り込まれていた。一方、SFIや学校では、語学だけではなく、スウェーデン社会を学ぶ内容もあり、社会の仕組みや法制度や権利なども学ぶことができる。インタビューした生徒は、民主主義や投票することなどの学習が良かったと語った。

ウプサラ市は他の自治体と比べると、新規移民や難民数が非常に多いというわけではないが、増加する難民への対応に、市として真摯に向き合っていた。日本は2019年4月の改正入管難民法の施行後、外国人人材の受入れが急ピッチで進んでいるが、同時に各自治体での共生施策も進められていくだろう。ウプサラ市の職員研修のような試みが日本の市町村の職員や現場の福祉関係者への現任研修にも必要になってくるのではないか。またウプサラ市のSFIや公立学校における教育面と社会面の双方からのアプローチなども、日本での外国人支援における教育・福祉の連携協働の重要性を暗示する。今後、日本社会も外国人や外国につながる人たちの受入れ・定住(永住)を十分に視野に入れて、ウプサラ市のように「効率よく」そして「民主的な社会参加」を基盤とする共生施策を検討していくことが望まれる。

注

- 1) Statistics Sweden 'Summary of Population Statistics 1960-2018'
(<https://www.scb.se/en/>)
- 2) 外国生まれの人、外国生まれの両親をもつスウェーデン生まれの人を指す。
- 3) スウェーデンの難民のカテゴリーは、難民条約の難民、UNHCRの割り当て難民、国際的な保護を必要とする者、人道的理由による者などを含む。
- 4) Swedish Migration Agency 'Residence permits granted 1980-2018'
(<https://www.migrationsverket.se/English/Startpage.html>)
- 5) Uppsala Kommun International (<https://international.uppsala.se/>)
- 6) 'Population in Localities increased by 120000'
Statistical news from Statistics Sweden 2017-04-05. 9.30
- 7) この構想は、2016年から始まり、EUおよびウプサラ市の資金(それぞれ75%、25%)を得て、本格的に稼働することになった。
- 8) たとえば、避難する道で警察官に遭遇し、IDやパスポートを見せるように強要されるが、その時にそれらを所持していない人は、警察に連行されるが、所持していた人は通過できるといったように、ゲームをする過程でチェックポイントが設けられ、目的地に到達できるまでの間にいくつかの試練が待っている。
- 9) 筆者が訪問した際は、3のテーマの研修までが終了していた。
- 10) SFI in Uppsala (Uppsala Kommun) のリーフレットおよびウプサラ市のホームページ (<https://www.uppsala.se/sprak/english/>) より。個人番号は、スウェーデンに1年以上滞在する人が、税務署に登録し得るものである。

[抄録]

近年のシリア難民の大量流入によって、ウプサラ市も多くの新規移住者に直面することになった。現在、ウプサラ市はストックホルムへの通勤圏となりつつあり人口増加にともない大規模開発がすすめられてきている。本報告は、移住者への定住支援・社会統合政策について、ウプサラ市の取組の一端を報告する。2019年3月に実施された関係者・当事者からの聞き取り調査を踏まえ、ウプサラ市(コミュニティ)の市役所の社会統合に関する研修プログラム、市の運営する成人移民向けスウェーデン語学校(SFI)および公立学校での生徒へのスウェーデン語学習支援等の現状や課題について報告する。ウプサラ市は地方自治体主導型で移住者に対して効率の良い人材活用を図り、行政サービスの質の向上に積極的に取り組んでいたことが明らかになったといえる。
